佐　伯　城　跡

総合調査報告書

総論編

2022

佐伯市教育委員会

佐　伯　城　跡

総合調査報告書

総論編

2022

佐伯市教育委員会

佐伯城跡と佐伯城下町　南東から

佐伯城跡と佐伯市街地遠景　南から

序　文

本書は平成27年度から令和３年度まで国庫補助を受けて実施した、第二次佐伯城跡調査事業の成果に加えて、平成21年度から25年度に実施した第一次佐伯城跡調査事業の成果も集約した、佐伯城跡に関する総合的な調査報告書です。

佐伯市は広大な面積を有する大分県南部の自治体で、その中心市街地は市内を流れる番匠川が佐伯湾へと注ぐ河口近くに位置します。佐伯城は、市街地を見下ろす城山（築城時は八幡山）に築かれた山城です。築城者は佐伯藩の初代藩主・毛利高政とされ、近世を通じて毛利家のもとで管理されてきました。現在の佐伯城跡は広く一般に開放され、歴史を感じる史跡として、また自然豊かな公園として、さらには市街と佐伯湾を眼下に収める眺望の地として、毎日多くの市民が登っています。

この度の調査事業によって、佐伯城跡の歴史的な価値について、多方面から光をあてることができました。とりわけ築城の経緯や初期の佐伯城の姿に言及できる石垣の存在、山城を維持していくための様々な技術が明らかとなり、これまで知られてきた佐伯城の理解に修正を迫る成果を得ることができました。そして、それらを裏付ける多数の絵図史料や文献史料からは、他藩領からの技術も導入してきた佐伯藩のたゆまぬ努力だけでなく、佐伯藩領民の協力もあって守られてきたことがうかがえます。近代となり城下町が現在の中心市街地へと大きく様変わりしていくなかでも佐伯城跡は郷土の史跡として関心を集め、現在に至るまで受け継がれてきました。三の丸の櫓門や御殿の一部が修理・移築を経ながらも残されてきたことは、佐伯城跡を大切に思う市民の努力の結実と言えます。

佐伯城跡は、佐伯市の歴史と文化のシンボルともいえる最も身近な文化財であるとともに、学術的にも極めて高い価値を持つ史跡であることが明らかになってきました。本書が佐伯城跡のさらなる研究の深化や、日本の城郭研究・近世史研究などに幅広く活用されることを期待いたします。

最後になりますが、佐伯城跡調査指導委員会の先生方をはじめ、文化庁文化財第二課、大分県教育庁文化課ほか御指導と御助言を賜った皆様、並びに関係各位に厚くお礼を申し上げます。

令和４年３月

佐伯市教育委員会
教育長　宗岡　　功

例言・凡例

・本書は、平成27～令和３年度に実施した佐伯城跡の総合的な調査報告書である。報告書は、佐伯城跡の調査成果をまとめた総論編と、佐伯城跡の石垣調査票及び佐伯城跡に関する絵図史料・古写真、文献史料・佐伯新聞の記事一覧をまとめた資料編で構成される。
・調査・整理作業は佐伯市教育委員会　福田聡・福永素久が行った。
・本書で用いる方位は座標北、座標は世界測地系、標高は絶対高である。
・調査にかかる記録類や出土遺物は、佐伯市教育委員会が保管している。
・本書の編集は福田・福永が行った。
・本書の執筆は、第１章～第３章、第４章第１節～第３節、第６章を福田が行い、第４章第４節・第５節を福永が執筆した。また、第５章は佐伯城跡調査指導委員である宮武正登氏（佐賀大学全学教育機構教授）に玉稿を頂いた。
・石垣調査票作成は株式会社とっぺんに委託して行った。
・発掘調査における実測図作成・写真撮影は福田・福永が行った。
・挿図の縮尺は、図ごとに示した。
・和暦は、各節の初出のものに対応する西暦を（　）書きで示し、以降は適宜省略した。
・総論編に引用する文献史料は、資料編の文献史料記事一覧の掲載番号を（資No.　）のように省略して示した。
・本書に掲載する絵図の史料名は原題どおりとし、原題がないものについては、調査者が仮題を付した。仮題を付したものは、資料編の一覧において［　］でくくって区別した。
・本書で使用する写真の名称は、全て写真の内容から調査者が付したものである。
・絵図史料・文献史料・佐伯新聞の漢字・かなは、原則として現行通用字体に改めた。
・資料編の絵図史料・古写真・文献史料記事一覧・佐伯新聞記事一覧は古いものから順に掲載したが、古写真は写っている内容によって若干前後したものもある。
・本書に掲載した絵図史料・文献史料の所蔵者は次ページのとおりである。総論編の各節においては、所蔵者を省略した。

文献史料所蔵者

史料分類	所蔵者
佐伯藩政史料	佐伯市歴史資料館
温故知新録	佐伯市歴史資料館
佐伯新聞	佐伯市平和祈念館やわらぎ

絵図史料所蔵者

史料名	製作年代	所蔵者
［佐伯城修復願図］	宝永６年（1709）	個人
二之御丸惣地引之図	享保年間	佐伯市歴史資料館
［佐伯城絵図］	享保17年（1732）	個人
御城石垣塀破損絵図	享保19年（1734）	個人
豊後国佐伯城塀石垣下共ニ破損之絵図	享保20年（1735）	個人
御城并御城下絵図	元文３年（1738）	佐伯市歴史資料館
豊後国佐伯城破損之覚	延享２年（1745）	佐伯市歴史資料館
豊後国佐伯城破損之覚	明和７年（1770）	個人（毛利家資料）
御城内御絵図惣間取之図	天保５年（1834）	個人
三之御丸絵図面	天保５年（1834）か	個人（毛利家資料）
尾野上御茶屋之尾崎平地絵図	嘉永２年（1849）	佐伯市歴史資料館
豊後国佐伯城破損之覚	安政２年（1855）	佐伯市歴史資料館
御奥御建縄	文久３年（1863）	個人
三御丸五歩壱間之図	明治初期	個人（毛利家資料）
佐伯城下地図	明治初期か	個人
県庁五歩壱間之図	明治４年（1871）	個人
豊後国佐伯城図	明治初期	しろはく古地図と城の博物館富原文庫
御山城之図	明治初期か	個人（毛利家資料）
鶴谷城之図	明治初期か	佐伯市歴史資料館
佐伯藩時代屋敷図	大正４年（1915）	佐伯市歴史資料館
毛利神社風地図	昭和２年（1927）	佐伯市教育委員会
毛利神社風致図	昭和８年（1933）	佐伯市教育委員会
御本丸二重御櫓三十歩一之図	不明	個人
西御丸梁行三拾分一図	不明	個人
御櫓拾歩一図	不明	個人

目　次

第１章　はじめに……1
　第１節　調査にいたる経緯……1
　第２節　調査体制……2
第２章　地理的・歴史的環境……4
　第１節　地理的環境……4
　第２節　歴史的環境……7
　第３節　佐伯城の沿革……12
第３章　調査の経過と概要……15
　第１節　一次調査……15
　第２節　二次調査……15
第４章　調査の成果……17
　第１節　測量調査……17
　　１．目的と方法……17
　　２．佐伯城跡の構造……17
　第２節　石垣調査……34
　　１．目的と方法……34
　　２．石垣の現状……34
　第３節　絵図・文献史料調査……55
　　１．目的と対象史料……55
　　２．初期の佐伯城……56
　　３．宝永～享保の修理……59
　　４．延享の修理……63
　　５．安政の修理……66
　　６．三の丸櫓門の改築と御殿の修理……69
　　７．廃城以降の佐伯城……70
　第４節　建築物調査……75
　　１．現存建築物……76
　　２．遺構として残る建築物……79
　第５節　確認調査……89
　　１．三の丸の調査……89
　　２．二の丸の調査……94
　　３．捨曲輪の調査……101
　　４．山頂周辺で表採した瓦……104
　　５．佐伯城跡の瓦の分類……106
第５章　特論　佐伯城の全体構造と石垣に関する歴史的意義……113
第６章　総括……126
報告書抄録……153

挿図目次

図１　佐伯城跡位置図（S=1/2,000,000）……４
図２　佐伯市全体地形図（S=1/500,000）……５
図３　豊後水道周辺の地質構造区分図……５
図４　佐伯城跡周辺遺跡分布図（S=1/50,000）…６
図５　梅牟礼城跡と上岡・稲垣地区　南から……７
図６　佐伯藩の領域……８
図７　毛利家略系図……９
図８　佐伯城下町の構造……10
図９　養賢寺の毛利家墓所　西から……10
図10　佐伯文庫現存本の一部……10
図11　佐伯海軍航空隊の掩体壕……11
図12　佐伯城跡（城山）と
　　佐伯市街地周辺の地形　南西から……12
図13　佐伯城跡全体測量図（S=1/6,000）……18
図14「御城幷御城下絵図」（元文３年・部分）…18
図15　本丸・本丸外曲輪測量図（S=1/600）……19
図16「御城幷御城下絵図」（元文３年・部分）…19
図17　二の丸測量図（S=1/600）……21
図18「御城幷御城下絵図」（元文３年・部分）…21
図19「二之御丸惣地引之図」（享保年間）……22
図20　西出丸測量図（S=1/600）……23
図21「御城幷御城下絵図」（元文３年・部分）…23
図22「豊後国佐伯城図」（明治初期・部分）……24
図23　北出丸測量図（S=1/600）……25
図24「御城幷御城下絵図」（元文３年・部分）…25
図25　搦曲輪Ⅰ測量図（S=1/1,500）……26
図26「御城幷御城下絵図」（元文３年・部分）…26
図27　搦曲輪Ⅱ測量図（S=1/1,500）……26
図28「御城幷御城下絵図」（元文３年・部分）…26
図29　搦曲輪Ⅲ・Ⅳ測量図（S=1/1,500）……27
図30「御城幷御城下絵図」（元文３年・部分）…27
図31　雄池・雌池測量図（S=1/1,500）……28
図32「御城幷御城下絵図」（元文３年・部分）…28
図33　雄池・雌池測量図（S=1/500）……28
図34　三の丸測量図（S=1/1,500）……29
図35「御城幷御城下絵図」（元文３年・部分）…29
図36「三御丸五歩壱間之図」（明治初期）……30
図37　登城の道・独歩碑の道・翠明の道
　　周辺測量図（S=1/3,000）……32
図38「御城幷御城下絵図」（元文３年・部分）…32
図39　若宮の道周辺測量図（S=1/2,000）……33
図40「御城幷御城下絵図」（元文３年・部分）…33
図41　絵図から判明している佐伯城跡修理履歴…35
図42　天守台・本丸・本丸外曲輪石垣配置図……36
図43　天守台石垣（No.001・002・005）……36
図44　毛利神社を写した絵葉書と
　　現状の石垣（No.003）……37
図45　本丸北西の隅角部（No.101・102）……37
図46　毛利神社前面の石垣（No.101 ～ 105）……37
図47　本丸北西隅石垣（No.116・117）……38
図48　本丸外曲輪東の虎口……38
図49　登城の道の石畳と面面の石垣……38
図50　表面に多数の小穴がある築石……38
図51　No.227・228の排水口跡 ……39
図52「御山城之図」（明治初期かの）の排水口……39
図53　No.238検出状況……39
図54　No.234 ～ 237検出状況……40
図55　No.234 ～ 237検出状況……40
図56「御本丸北側石垣堀破損之絵図」
　　（享保19年・部分）……40
図57　二の丸石垣配置図……42
図58　廊下橋下の石垣（No.301・302）……42
図59　No.302左下隅の刻印……43
図60　No.308から生える樹木……43
図61　No.311・312隅角部上面の矢穴列 ……43
図62　No.323・324の隅角部 ……44
図63　No.324のハバキ石垣……44
図64　No.325の右隅角部の角度……44
図65　西出丸石垣配置図……45
図66　No.410 ～ 412の平面形状……45
図67「豊後国佐伯城破損之覚」（安政２年）
　　の西出丸の破損状況……45
図68　No.414の排水口……46
図69　西出丸下搦曲輪から見たNo.416・417 ……46
図70　北出丸石垣配置図……47
図71　No.520左上に突出する岩盤……47
図72「御城幷御城下絵図」（元文３年）
　　に描かれる三の丸……47
図73　三の丸石垣配置図……48
図74　No.602下部のハバキ石垣……48
図75　築石に付着する貝殻跡（No.605）……49
図76　No.605・606隅角部の大型石材 ……49
図77　No.614の土塀の跡と目地……49
図78　No.619・622の現状　東から ……49
図79　佐伯城跡西斜面の石垣配置図……50
図80　雄池背面の石垣（No.701 ～ 704）……51

図81　雄池とNo.709……51
図82　被災前の雌池石垣（No.711 ～ 714）……52
図83　被災前の雌池石垣（No.713・714）……52
図84　被災後の雌池……52
図85　復旧後の雌池石垣（No.713・714）……52
図86　佐伯城跡東斜面の石垣配置図……53
図87　登城の道の石垣（No.716 ～ 718）……53
図88「佐伯城修復願図」（宝永６年）……58
図89「二之御丸惣地引之図」（享保年間）……61
図90「御城幷御城下絵図」（元文３年・部分）…62
図91「豊後国佐伯城破損之覚」
（延享２年）……64
図92「豊後国佐伯城破損之覚」
（安政２年）……66
図93「豊後国佐伯城図」（明治初期）……67
図94「御城内御絵図惣間取之図」
（天保５年）……68
図95「三御丸五歩壱間之図」（明治初期）……68
図96「佐伯城三之丸沿革記」（明治38年）……69
図97「佐伯藩時代屋敷図」
（大正４年・部分）……70
図98「県庁五歩壱間之図」（明治４年）……71
図99　大手前から三の丸を望む（明治40年代）…72
図100　三の丸御殿書院（明治40年代）……72
図101　三の丸御殿と校舎（明治40年代）……72
図102「毛利神社風地図」（昭和２年）……73
図103　毛利神社と階段（昭和８～ 20年）……74
図104　三の丸御殿（昭和40年代）……74
図105　櫓門から見た三の丸御殿（昭和40年代）…74
図106　主な建物配置図（S=1/3,000）……75
図107　三の丸櫓門表側外観……76
図108「御城幷御城下絵図」（元文３年）の
三の丸櫓門……76
図109　修理前の櫓門（昭和30年頃）……76
図110　櫓門内部（天井部分）……77
図111　梁に差し込まれた出梁・隅木……77
図112　櫓門裏側外観……77
図113　三の丸御殿外観（昭和40年頃）……77
図114　住吉御殿外観　北から……77
図115　三の丸御殿玄関・式台・御広間部分……78
図116　住吉御殿内部に残る長押の釘隠し……78
図117　三の丸御殿解体風景（昭和45年）……78
図118　解体前の御殿内部（昭和45年）……78
図119　住吉御殿内部（現況）
御広間から御使者の間を望む……78
図120　天守台現況　東から……79
図121「二之御丸惣地引之図」（享保年間・部分）
に記載された居宅……80
図122「御用日記」（享保15年）に描かれた
居宅の上段付近……80
図123「御本丸二重櫓三拾歩一図」（年代不詳）…81
図124「御山城之図」（明治初期か）に描かれた
本丸二重櫓……81
図125　二の丸二重櫓台……82
図126「二之御丸惣地引之図」（享保年間）に
描かれた櫓平面……82
図127「御山城之図」（明治初期か）に描かれた
二の丸二重櫓……82
図128「二之御丸惣地引之図」（享保年間）に
描かれた二の丸平櫓と櫓門……83
図129　西出丸二重櫓台……83
図130「西御丸梁行三拾分一図」（年代不詳）……83
図131　北出丸二重櫓台……84
図132　二の丸櫓門跡　南から……84
図133「御山城之図」（明治初期か）
に描かれた櫓門……84
図134　櫓門跡に残る門礎……84
図135　櫓門跡現況　東南から……85
図136　冠木門跡現況……85
図137　冠木門・廊下橋相関……85
図138　西出丸冠木門跡……86
図139　復元された府内城廊下橋……86
図140　廊下橋跡現況　南西より……86
図141「御山城之図」（明治初期か）に
描かれた廊下橋……86
図142　登城ルートＡ・Ｂ案（S=1/3,000）……87
図143　三の丸確認調査位置図（S=1/1,000）……89
図144　トレンチ１平面・土層図（S=1/40）……90
図145　トレンチ２平面・土層図（S=1/50）……92
図146　トレンチ３平面・土層図（S=1/40）……93
図147　トレンチ１出土遺物（S=1/3）……93
図148　二の丸確認調査位置図（S=1/2,000）……94
図149　トレンチ１平面・土層図（S=1/50）……95
図150　トレンチ２平面・土層図（S=1/40）……96
図151　トレンチ３平面・土層図（S=1/40）……98
図152　トレンチ１　出土瓦（S=1/4）…… 100
図153　捨曲輪Ⅳ確認調査位置図（S=1/1,250）… 101
図154　トレンチ４平面・土層図（S=1/50）…… 102
図155　トレンチ５平面・土層図（S=1/40）…… 103
図156　軒平瓦模式図 …… 104

図157　軒丸瓦模式図 …… 104
図158　表採瓦実測図（S=1/4） …… 105
図159　軒平瓦分類（S=1/4） …… 107
図160　軒丸瓦分類（S=1/4） …… 109
図161　鯱瓦模式図 …… 110
図162　鬼瓦（S=1/8） …… 111
図163　倭城との塁線の比較 …… 114
図164　三の丸東面　慶長期石垣 …… 115
図165　北出丸　虎口空間平面図 …… 115
図166　高知城詰門 …… 116
図167　廊下橋下（二の丸東端）石垣No.302 … 116
図168　小倉城天守台南西隅石垣 …… 116
図169　二の丸二重櫓下 石垣 No.324 …… 117
図170　二の丸二重櫓下 石垣 No.324
　北西側隅角部…… 117
図171　駿府城　初期（徳川家康期）天守台 … 117
図172　肥前名護屋城山里口石垣 …… 118
図173　金沢城東ノ丸丑寅櫓下石垣 …… 118
図174　江戸城本丸西面（白鳥濠東岸）石垣 … 119
図175　北西上方から見た「雛壇状石垣」
　No.231 ～ 238全景…… 121
図176　雛壇状石垣　1段目天端の「小端立て」
　と傾斜の様子…… 121
図177　石井樋「天狗の鼻」…… 121
図178　盛岡城二ノ丸「ハバキ」石垣 …… 123
図179　鳥取城天球丸「巻石垣」（復元） …… 123

史料目次

史料１　「郡方町方御用日記」（享保20年）資No.319…… 41
史料２　「毛利高寛公申渡覚」（享保11年）資No.228…… 57
史料３　「佐伯拝領後高致公等事跡幷召出家臣履歴等覚」（享保年間か）資No.356…… 57
史料４　「三の丸櫓門修復記」…… 58
史料５　「高慶公御手日記写」（宝永４年）資No.29 …… 59
史料６　「毛利高寛公申渡覚」（享保11年）資No.228…… 60
史料７　「高慶公御手日記写」（享保12年）資No.242…… 61
史料８　「御仕置帳」（延享元年）資No.406…… 65
史料９　「羽野家所持毛利氏先祖書」（延享４年）資No.459…… 65
史料10　「郡方町方御用日記」（延享４年）資No.424…… 65
史料11　「郡方町方御用日記」（延享４年）資No.446…… 65
史料12　「御仕置帳」（延享４年）資No.456…… 65
史料13　「御用日記」（延享元年）資No.402…… 66
史料14　「城山還原之碑」（明治44年）…… 70
史料15　現在の独歩碑の道完成時の「佐伯新聞」（大正13年５月25日）…… 73
史料16　現在の若宮の道完成時の「佐伯新聞」（大正13年７月13日）…… 73
史料17　毛利神社落成時の「佐伯新聞」（昭和４年11月17日）…… 73

図版目次

巻頭図版
佐伯城跡と佐伯城下町　南東から
佐伯城跡と佐伯市街地遠景　南から
図版１…… 134
佐伯城跡山上部分全景　西から
本丸～二の丸拡大　南から
図版２…… 135
天守台　北東から
天守台石垣　南西から
本丸石垣　南西から
図版３…… 136
二の丸からみた本丸・本丸外曲輪　西から
二の丸全景　北東から
二の丸東側石垣　北から
図版４…… 137
雄池全景　西から
雌池全景　東から
雌池全景　西から
図版５…… 138
登城の道　東から
登城の道　北から
廊下橋付近　北東から
図版６…… 139
二の丸二重櫓石垣　北東から
本丸外曲輪北斜面「雛壇状石垣」　北東から
西出丸西側石垣　西南から
図版７…… 140
三の丸櫓門外観　南から
住吉御殿現況　北から
遺構図版１…… 141
三の丸トレンチ１遺構面１検出状況　南から
三の丸トレンチ１遺構面２検出状況　南から
三の丸トレンチ１礎石投棄状況　西から
遺構図版２…… 142
三の丸トレンチ２遺構面検出状況　南から
三の丸トレンチ３完掘状況　北東から
三の丸トレンチ３西壁土層　東から
遺構図版３…… 143
二の丸トレンチ１完掘状況　南から
二の丸トレンチ１玄関基礎石列検出状況　西から
二の丸トレンチ１玄関基礎石列検出状況　南から
遺構図版４…… 144
二の丸トレンチ２完掘状況　南から
二の丸トレンチ２石敷き検出状況　北から
二の丸トレンチ２石敷き検出状況　西から
遺構図版５…… 145
二の丸トレンチ３整地層検出状況　南から
二の丸トレンチ３完掘状況　南から
二の丸トレンチ３完掘状況　東から
遺構図版６…… 146
捨曲輪Ⅳトレンチ４完掘状況　南東から
捨曲輪Ⅳトレンチ５完掘状況　北東から
捨曲輪Ⅳトレンチ５南壁土層　北東から
遺物図版１…… 147
二の丸トレンチ１出土瓦
軒平瓦（Ａ類・江戸系）
遺物図版２…… 148
軒平瓦（Ｂ類・大坂系）
遺物図版３…… 149
軒平瓦（Ｃ類・細系）
軒平瓦（Ｄ類・その他）
軒丸瓦（Ａ－Ⅰ類）
軒丸瓦（Ａ－Ⅱ類）
遺物図版４…… 150
軒丸瓦（Ａ－Ⅱ類）
軒丸瓦（Ａ－Ⅲ類）
遺物図版５…… 151
軒丸瓦（Ａ－Ⅳ類）
鬼瓦
遺物図版６…… 152
鯱瓦
三の丸トレンチ１整地層中出土磁器

第１章　はじめに

第１節　調査にいたる経緯

佐伯（さいき）市は大分県の南端に位置する。近世における佐伯藩領の大半を現在の市域に引き継いでおり、佐伯市の歴史や文化を語るうえで、佐伯藩はその中心となる。佐伯藩の中枢として、八幡（はちまん）山（現・城山）に築かれた佐伯城は、現在は都市公園として親しまれるとともに、佐伯市民にとっての地域の誇りであり、文化のシンボルでもある。

佐伯城跡については近年まで行政や学術機関による本格的な調査は行われてこなかった。調査は専ら郷土史研究者の手によって、絵図史料や文献史料、そのほかの伝承などの収集・紹介・分析などがなされ、それによって佐伯城に関する情報が蓄積されてきた。これまで組織的な調査が行われなかった背景には、こうした郷土史研究者による史料の調査が活発に行われ、豊富な成果を上げていたこと、そして佐伯市民の保護意識も高く、緊急調査を迫られる大規模開発を免れてきたこともあるだろう。これらの調査成果については、昭和 49 年（1974）に刊行された『佐伯市史』でその段階での総括が行われ、佐伯市民に周知されている。

しかし、ここまでの佐伯城跡の調査や、成果の普及啓発などに使用されてきたのは、都市計画図や住宅地図、絵図等を利用し研究者や事業者が個々に作成した配置図などであった。行政面でも、測量成果にもとづく正確な平面図がなかったため、研究者や観光客への情報提供にも苦慮していたという事情があった。また、石垣の修復や保護、急傾斜地対策や治山対策など、公園管理上の事業についても、詳細な記録が引き継がれているものは少なく、様々な事業の計画的な実施や、共通理解を図ることにも支障があった。

そこで、佐伯市教育委員会では平成 21 年度（2009）から今後の研究・活用・維持管理のための基礎情報として、佐伯城跡を対象とした測量調査を平成 25 年度（2013）まで継続実施した。この一次調査によって、現地踏査を踏まえて佐伯城跡を対象とする絵図類と比較した結果、城山全域を城郭として捉え直すことが可能となった。調査成果は『佐伯城跡測量調査報告書』にまとめて刊行している。一次調査の成果を受けて、令和元年（2019）に佐伯城跡は佐伯市指定史跡となった。

一次調査は佐伯城跡の現状把握と、その記録のための基礎資料を作成することを主眼に置いたものである。したがって、城郭の主要構成要素である石垣の現状調査や、文献史料の調査、発掘調査による遺構の残存状況の確認などは、後の課題として残されていた。

これを受けて、課題の一つであった石垣の現状把握を行うため、石垣調査票の作成を軸として平成 27 年度（2015）から二次調査を開始した。調査の過程において、特殊な技術による石垣の存在や、絵図・文献史料の豊富さなどが確認されたことから、調査の内容を拡充する方針に変更し、石垣調査を主軸に、確認調査、文献資料調査も行い、佐伯城跡の総合的な調査とすることとした。

本報告書は、平成 27 年度から令和 3 年度（2021）までに実施した佐伯城跡の二次調査の成果をまとめたものであるが、佐伯城跡の総合的な特徴を明らかにするため、一次調査の成果をも踏まえて報告するものである。

【参考文献】
・佐伯市史編さん委員会　1974 『佐伯市史』
・佐伯市教育委員会　2014 『佐伯城跡測量調査報告書　佐伯市内遺跡試掘確認調査報告書』 佐伯市文化財調査報告書第５集

第２節　調査体制

調査は以下の体制で実施した。

【調査主体】

佐伯市教育委員会

教育長	分藤高嗣（平成 27・28 年度）
	土﨑谷夫（平成 29・30・令和元年度）
	宗岡　功（令和２・３年度）
教育部長	児玉修一（平成 27 年度）
	丸山初彦（平成 28 年度）
	小野正司（平成 29 年度）
	狩生浩司（平成 30 年度・令和元年度）
	渡邉和彦（令和２・３年度）

【調査事務】

佐伯市教育委員会社会教育課文化振興課（平成 27 ～令和元年度）

文化財係（令和２～３年度）

課長	長田文春（平成 27 ～ 29 年度）
	淡居宗則（平成 30 ～令和２年度）
	川野眞司（令和３年度）
参事	吉武牧子（令和元～３年度）
課長補佐兼総括主幹	吉武牧子（平成 29・30 年度）
総括主幹	吉武牧子（平成 27・28 年度）
	成松重雄（平成 27・28 年度）
	加嶋克俊（平成 29 年度）
	高司昌彦（令和元年度）
	橋本紀昭（令和２・３年度）
副主幹	福田　聡（令和元～３年度）
主査	福田　聡（平成 29 年度）
主任	福田　聡（平成 27・28 年度）
	中元洋司（平成 30 年度）
嘱託職員	五十川慎也（平成 27・28 年度）
会計年度任用職員	福永素久（令和２・３年度）

【佐伯城跡調査指導委員】※肩書は令和４年３月時点

豊田　寛三　（大分大学名誉教授・別府大学名誉教授）

田中　裕介　（別府大学文学部教授）

宮武　正登　（佐賀大学全学教育機構教授）

伊東　龍一　（熊本大学大学院先端科学研究部教授）

また、平成 30 年度の調査指導委員会において石川県金沢城調査研究所の北垣聰一郎名誉所長を招請し、石垣についての現地検討と所見をいただいた。

【指導・助言】
近江　俊秀　（文化庁文化財第二課）
山下　信一郎（文化庁文化財第二課
森先　一貴　（文化庁文化財第二課）
山路　康弘　（大分県教育庁文化課）
井　大樹　　（大分県教育庁文化課）
佐藤　信　　（大分県教育庁文化課）

このほか、三の丸庭園の現状については京都芸術大学の仲隆裕教授に、瓦の調査・整理については大分県立埋蔵文化財センターの吉田寛氏に、それぞれ貴重な御助言を頂いた。また、石垣調査票の作成と文献史料記事一覧の作成には森竹美恵氏（佐伯市教育委員会社会教育課会計年度任用職員）、根塚薬摘氏（別府大学大学院生）の協力を得た。記して感謝申しあげます。

第２章　地理的・歴史的環境

第１節　地理的環境

平成17年（2005）３月３日、大分県南部の中心であった佐伯市と、海岸部の上浦町・鶴見町・米水津村・蒲江町、山間部の弥生町・宇目町・直川村・本匠村の計９市町村が合併し、新たな佐伯市が誕生した。九州で最も広い903.14㎢の面積を有し、人口は約６万９千人（令和３年６月時点）である。農林水産業が盛んで、中でも水産業は県内の水産業生産量のおよそ３分の２を占めている。

佐伯市域の東は豊後水道・太平洋に面し、日豊海岸国定公園の一部をなすリアス海岸が連続する。複雑な地形と、山地から豊富に栄養素が流入することから好漁場として名高い。北は津久見市、西は臼杵市・豊後大野市、南は宮崎県延岡市と接している。南部から西部にかけては祖母傾国定公園の一部となっており、傾山、夏木山、桑原山をはじめとする急峻な山々が連なる山岳地帯である。

この広大な市域のほぼ中央を貫くように一級河川・番匠川が東流し、佐伯湾にそそいでいる。番匠川は豊後大野市と接する三国峠に源流があり、大小多数の支流を有している。佐伯市内を流れる河川の大多数が番匠川水系に属しており、幹川流路延長38㎞、流域面積46㎢に及ぶ。もう一つの大きな水系は、五ヶ瀬川水系である。佐伯市西部の宇目には最大の支流である北川が南流し、宮崎県延岡市で五ヶ瀬川に合流して太平洋へと注ぐ。このほか、二級や単独の水系が海岸部に多くみられる。これらの河川によって、山間部における小規模な河岸段丘や海岸部での沖積地が形成され、古くから集落が営まれてきた。

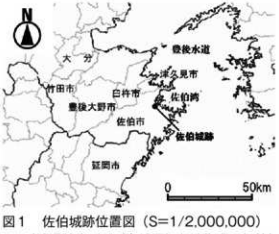


図１　佐伯城跡位置図（S=1/2,000,000）
（地理院タイル（白地図）より作成・加筆）

佐伯市の中心市街地は、番匠川河口付近に展開している。市内では数少ない比較的面積の広い低地で、その大半は近世以降に干潟を埋め立てて形成された土地である。市街地の周囲には長島、女島といった丘陵が点在し、向島や中の島などの地名にも、遠浅の海岸に小島が浮かぶ景観の名残を見ることができる。

市街地の北東は佐伯湾に面し、湾の最奥部にある佐伯港は大入島を正面に望む。大入島が湾の前面にあることで、波が穏やかな佐伯港は大分県南の主要港として発達し、重要港湾に指定されている。太平洋から北部九州や瀬戸内への海上流通拠点となっているほか、平成30年度（2018）までは高知県宿毛市へのフェリーも運行されていた。険しい地形に囲まれた佐伯では、水上交通の重要性は大きく、戦後に道路網が整備され自動車が普及するまでは、海岸部の集落と中心市街地との往復にも船が利用されることも多かったという。

佐伯城跡は、佐伯市街地を東に見下ろす標高146ｍの城山に築かれている。近世以前は、周囲には干潟が広がり、製塩を営む集落（塩屋村・塩屋千軒）があったと伝わる。麓の市街地は標高３ｍに満たない低地に広がっており、佐伯城跡の最高所との比高差は約140ｍを測る。

地質としては、佐伯地域一帯は、中央構造線によって分けられる西南日本の外帯（太平洋側）にあたり、秩父帯と四万十帯の北帯にまたがっている。津久見市から本匠・宇目が含まれる秩父帯の三宝山帯南縁部ではチャートや石灰岩を主とする床木層が特徴的で、特に石灰岩

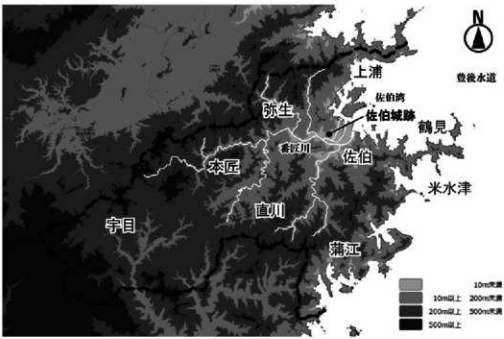


図2　佐伯市全体地形図(S=1/500,000)(地理院タイル(色別標高図)より作成・加筆)

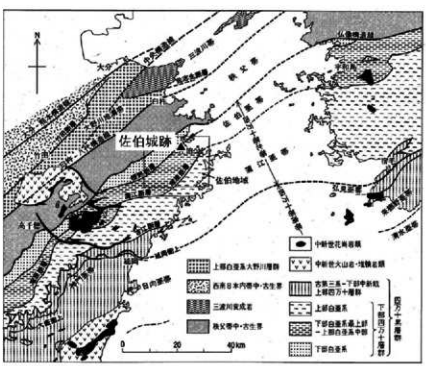
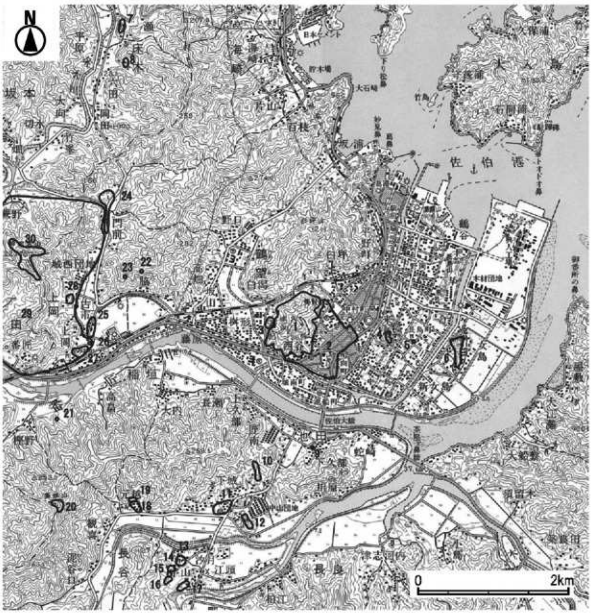


図3　豊後水道周辺の地質構造区分図（寺岡ほか1990に加筆）

は津久見市の基幹産業である石灰石産業を支えている。佐伯市においても、本匠で石灰石の採掘が一時期産業化されたほか、同地域は国指定天然記念物・小半(おなり)鍾乳洞をはじめ、いくつもの鍾乳洞が存在する地域として知られている。

佐伯市街地周辺は、四万十帯北帯のなかでも佐伯亜帯に属し、大部分が砂岩と泥岩の互層からなる。地層は北東―南西方向に分布し、ほとんどが北西方あるいは北方に傾斜する。佐伯城が築かれた城山も佐伯亜帯の一部であり、いたるところに砂岩と泥岩の露頭を見ることができる。



1．佐伯城跡	2．佐伯城下町	3．白潟遺跡	4．萩山遺跡
5．宝剣山古墳	6．女島山古墳群	7．大友山砦跡	8．瀬戸遺跡
9．岡ノ谷古墳	10．中山砦跡	11．下城遺跡	12．八幡山城跡
13．長良貝塚	14．上ノ台館跡	15．上ノ台遺跡	16．汐月遺跡
17．宇山城跡	18．元越遺跡	19．長谷山際遺跡	20．高城跡
21．樫野古墳	22．三上寺跡	23．二上寺跡	24．佐伯門前遺跡
25．古市遺跡	26．十三重塔	27．木戸城跡	28．曳地館跡
29．栂牟礼遺跡	30．栂牟礼城跡		

図4　佐伯城跡周辺遺跡分布図（S＝1/50,000）

第２節　歴史的環境

１．中世以前の佐伯

佐伯における先史時代の遺跡は、数の上では少ないものの、調査成果には重要なものが多い。番匠川の支流である大越川沿いの河岸段丘に営まれた森の木遺跡は、旧石器時代末から縄文時代草創期、早期までの遺物が豊富に確認されている。特に草創期の建物跡を伴う集落遺跡としては、現時点で大分県南部では唯一である。出土土器には宮崎平野周辺を中心に分布する隆帯文土器と同系統のものがあり、すでに九州東部における文化の交流があったことが指摘されている。このほかにも、佐伯門前遺跡など主に縄文時代早期の遺跡が河岸段丘上に展開する。

弥生時代の遺跡としては、九州における考古学調査の先駆けとなった、下城遺跡、長良貝塚、白潟遺跡がある。それぞれ大越川、堅田川、番匠川から近い丘陵端部に形成された遺跡で、下城遺跡は東九州の弥生時代前～中期を代表する下城式土器の標識遺跡となっている。どの遺跡も貝塚を伴い、当時の生業における狩猟採集活動の比重が高いことを示している。

古墳時代には、佐伯湾や番匠川を見下ろす島嶼部や丘陵で、尾根上や斜面の地形を改変して墳丘とした古墳が築かれている。その立地から佐伯湾一帯に勢力を張った有力首長層が葬られたと考えられる。発掘事例は少ないが、樫野古墳で出土した土師器には宮崎平野からの影響を受けた甕が見られ、縄文時代から続く東九州の交流の広さが窺える。

奈良・平安時代における佐伯一帯は、律令制下における豊後国海部郡穂門郷に属していたと考えられる。この時代では、墨書土器が出土した汐月遺跡が注目される。斜面に流れ出して堆積した土から出土したものだが、律令制下における公的施設が置かれていた可能性を示すものとして注目される。

地名としての佐伯が見える最も古い史料は、平安時代後期の『宇佐宮仮殿地判指図』や『本

図５　栂牟礼城跡と上岡・稲垣地区　南から

朝世紀』である。『本朝世紀』では、天慶４年（941）の藤原純友の乱において、純友の次将・佐伯是基が海部郡佐伯院を襲撃したとある。佐伯院の具体的な位置は未だ判然としないが、前記の汐月遺跡の周辺が有力視されている（佐伯市教委 1990）。この頃から地頭として勢力を伸ばして佐伯地域を支配したのが、佐伯氏の一族である。豊後一円に勢力を誇った大神氏に連なる一族で、大友氏が豊後に入国して以降、大神氏諸族が大友氏一族に取り込まれていくなか、佐伯氏は大友氏家臣団に組み入れられながらも独自の系譜を保った。文献史料による裏付けは限られるが、佐伯氏は水軍を擁して佐伯湾・豊後水道周辺の海上交通を掌握していたと考えられている（飯沼 2007）。大永７年（1527）と弘治２年（1556）には大友氏と対立関係を生じるものの、後には大友氏加判衆に名を連ね、年中行事では特別な待遇がとられるなど、大友家臣団の中でもやや特殊な立場にあったことが指摘されている（佐伯市教育委員会 1989）。

彼らの支配拠点は、番匠川を少し遡った上岡・稲垣地区であったと考えられている。この地区の周辺には十三重塔や阿弥陀如来坐像及び勢至・観音菩薩立像など、平安時代後期から戦国時代までの文化財が多数残されている。16 世紀代には番匠川左岸の栂牟礼山頂に栂牟礼城を築き、その東麓に家臣団居住地、寺社、市場が展開する城下集落が形成されていた。

文禄２年（1593）、文禄の役での失態を咎められて大友氏が豊後を去ると、佐伯氏もこの地を離れ、およそ 400 年間にわたる支配を終えた。

大友氏が去った豊後は、豊臣秀吉の直轄地となる。佐伯については、豊後北部の検地奉行を務めた宮部継潤の管轄下に入り、佐伯藩の成立まで宮部による管理が行われたと考えられている（楢本 1983）。

2．佐伯藩の概要

慶長６年（1601）、初代藩主となる毛利高政が佐伯に入部し、佐伯藩の歴史が始まる。

藩の領域は、現在の行政区では津久見市の南部を北限に、現在の佐伯市から宇目を除く範囲

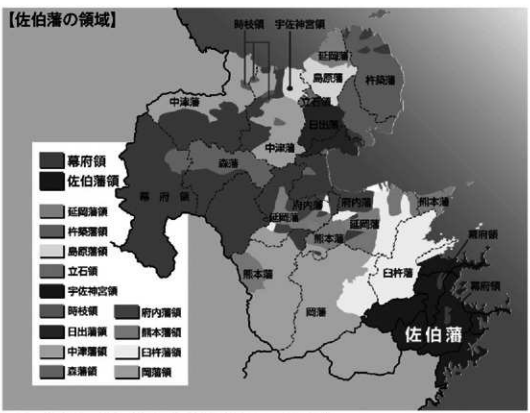


図６　佐伯藩の領域（佐伯市歴史資料館2014より転載）

が相当する。領地石高は２万石である。

初代藩主となった毛利高政は、豊臣秀吉の側近として活躍した人物である。もとは森姓を名乗り、明石に３千石を与えられていた。天正10年（1582）の備中高松城攻めに従軍し、その後のいわゆる中国大返しの際に、毛利輝元との停戦交渉のために人質として送り出され、このときに読みが同じなため、輝元からの勧めで姓を毛利に変えたと伝えられている。いくつかの合戦での武功も伝えられており、秀吉の九州平定や第一次・第二次朝鮮出兵では舟奉行や目付を任され、連絡調整や物資輸送などの後方支援を担う、官僚的武将として実績を上げた人物であった。文禄３年（1594）または４年（1595）には大名に取り立てられ、豊臣秀吉直轄地となっていた日田・玖珠に入部、日田郡隅城を拠点とし、（楢本 1983・豊田 2000）、その支配は慶長５年（1600）まで続いた。その間に、中世の在地領主が築いた玖珠郡の山城・角牟礼城を、縄張りの変更や石垣の導入などによって、近世城郭へと改修している（玖珠町教委 2000）。

関ケ原の合戦ののち、初代佐伯藩主となった毛利高政は、中世・佐伯氏の居城であった栂牟礼城を廃し、番匠川の河口により近い八幡山（はちまん）を城地と決定し佐伯城を建設した。以降、八幡山は城山と称されるようになる。また、これと同時に新たな城下町の建設に取り掛かった。

この頃の八幡山の麓には干潟が広がり、塩屋千軒と呼ばれる製塩集落があったと伝わる。高政は、この干潟を埋め立てて拡張し、城下町とした。なお、元和元年（1615）まで日田・玖珠郡のうち２万石余を代官として残り、支配した。

佐伯城下町は番匠川の本流がその外周を流れ、支流の中川などが内部を区画し、それぞれを外堀・内堀のように取り込んでいる。近世初期については史料が乏しいものの、17世紀後半頃には佐伯城を核に、南東から南の山裾を武家地、その東を内町（町人地）とし、南の番匠川に面する一画を船頭町とする構成が成立したと考えられる（楢本 1983）。内町と船頭町は

図７　毛利家略系図
（佐伯市歴史資料館2014より転載）

両町と称され、佐伯藩の経済活動を支えた。

城下町には寺町はなく、それぞれ異なる宗派の寺が５か所に分散して置かれた。道の曲がり角や食い違い部などの要所に配置され、非常時には防衛線となることが意図されている。藩主の菩提寺として慶長10年（1605）に創建された養賢寺には毛利家の墓所が営まれ、歴代の藩主・夫人・子女の墓塔が並ぶ。また善教寺と潮谷寺は中世の拠点となっていた上岡・稲垣地区に営まれていたものを移転したものである。さらに古市町の住人を町人地の一部に移住させ、中世の集落からの引継ぎが図られている。こうした城下町の構成は近世を通じて大きく変化しておらず、現在でも道路や地名にその名

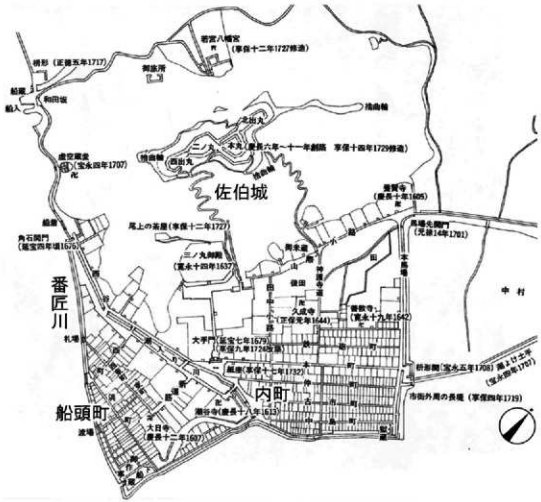


図8　佐伯城下町の構造（佐伯市1982より改変）

図9　養賢寺の毛利家墓所　西から

図10　佐伯文庫現存本の一部

残がよく残っている。

一方、山がちで耕作地の少ない佐伯藩では、現在に至るまで漁業が重要な産業である。初代の高政もその重要性を意識し、藩政の初期から様々な漁業振興策をとった（豊田 1983）。なかでも海岸部に面した山での無計画な木竹の伐採を禁止して魚付林の保護を命じたことは、高政に山と海の関係に関する知識があり、資源管理の視点を持っていたことを示すものとして注目される。こうした振興策の成果もあり、漁業や交易による利益は佐伯藩の財政を大いに支えた。いつからか「佐伯の殿様浦でもつ」と言われるほどの経済的利益をあげ、特に干鰯（油を搾り取った鰯。肥料に用いる。）は、近畿地方

を中心に高く評価された。

歴代藩主の中でも6代・高慶は中興の祖と称えられる。5代・高久に続いて豊後森藩の久留島家からの養子であったが、学問を奨励し、綱紀粛正、産業振興に取り組んで藩政を安定させた。また荒廃が進んでいた佐伯城の修理を約20年間かけて実施した。宝永4年（1707）10月に発生した大地震の際は、津波が来ることを予想して、地震の直後に家臣・町人などの身分や性別にかかわらず城山へ登らせ、城内へも遠慮なく避難するように開放した。さらに被害の復旧とあわせて、宝永4年と享保4年（1719）に城下町を囲む潮除け土手を築いた。こうした災害対策は安政元年（1854）の大地震でも効果を発揮し、城下町での死者はなかった。

8代・高標は、因幡国若桜藩主・池田定常、近江国仁正寺藩主・市橋長昭と並んで三大学者大名として知られた。その功績は藩校・四教堂と佐伯文庫の創設に顕著である。安永4年（1775）に開かれた四教堂は、佐伯文庫の一部などを教科書に、学問と武芸を教えた。教授陣は広瀬淡窓の師として知られる松下筑陰など一流の儒学者を藩外からも招き、優秀な人材を輩出していった。佐伯文庫は高標自身が選書し、漢籍を中心に多様な分野を偏りなく収集したもので、およそ8万巻（約4万冊）に及んだとも言われるコレクションである。しかし、10代・高翰が佐伯文庫のうち約2万冊を幕府の求めに応じて献上し、残された書籍も明治期の混乱で多くが散逸した。現在佐伯に残るものは3,000冊程であるが、それでも学術的価値の高い書籍が多数含まれている。幕府に献上されたものは、現在の宮内庁書陵部や国立公文書館へと引き継がれている。

毛利家による統治は近世を通して継続し、12代・高謙が明治2年（1869）に版籍を奉還、ついで明治4年（1871）の廃藩置県によって佐伯藩の歴史は幕を閉じた。

3．近代の佐伯

佐伯藩は明治4年の廃藩置県により佐伯県となり、ついで大分県の一部に編入された。明治10年（1877）に勃発した西南戦争では、大分県南部も各地が戦場となった。佐伯も例外ではなく、市街地に西郷軍が侵入し、これを排除するため、政府軍の軍艦が佐伯湾から市街に砲撃を加えている。

明治後半頃からは、大分県南部は国防上の要衝と位置付けられ、豊後水道を挟んだ大分県東岸と愛媛県・高知県西岸で、豊予海峡を防衛するための砲台等の整備が進められた。佐伯湾では明治から昭和にかけて、海軍の艦隊による演習が頻繁に行われる。

昭和9年（1934）、佐伯湾の一部を埋め立てて、佐伯海軍航空隊の基地が建設され、次いで昭和14（1939）年には佐伯海軍防備隊が設置された。これを機に佐伯の市街地では上水道や道路などのインフラ整備が進み、人口も増加して賑わった。しかし昭和16年（1941）に太平洋戦争が始まり、戦況は次第に悪化。昭和20年（1945）には米軍による空襲が激しくなり、軍施設だけでなく多数の民間施設にも被害が及んだ。戦前から戦中にかけて設置された航空隊・防備隊関連施設や防空壕は、現在も佐伯市街地の各所に残っている。

図11　佐伯海軍航空隊の掩体壕（国登録有形文化財）

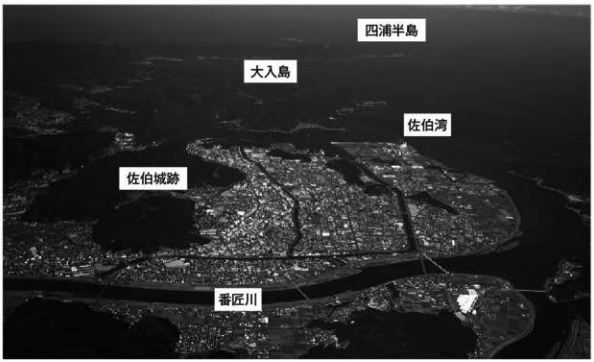


図12　佐伯城跡（城山）と佐伯市街地周辺の地形　南西から

第3節　佐伯城の沿革

佐伯城は、初代佐伯藩主となった毛利高政が築いた山城である。藩の記録（『温故知新録』ほか）によると、慶長7年（1602）から築城が開始され、4年をかけて完成したとされる。

慶長6年に佐伯に入部した毛利高政は、翌年から居城の築城を開始した。このときの佐伯には、中世を支配した佐伯氏の居城であった栂牟礼城が残されていた。しかし高政は栂牟礼城を廃し、八幡山（現在の城山）での築城を決定した。その背景には、北・西を山に、南を番匠川に囲まれて防衛に向く地形であることと、番匠川の河口に面して水運の利便性が高いことに注目したためとされる（佐伯市 1982）。

八幡山の山頂には、緒方惟栄が建久年間に創建したと伝わる八幡社があったが、高政はこれを北西の山裾に移転させ、若宮八幡社とした。八幡社移転後の山頂の最高所を本丸とし、その周囲を本丸外曲輪で囲み、南に二の丸・西出丸、北に北出丸を設けた。当初は山頂に居住し、寛永14年（1637）に山麓に三の丸を増築、以降は三の丸に居住したとも伝えられるが、初期から小規模な三の丸があった可能性を指摘する見解（小野 1966）もある。少なくとも山頂部の構造は、現在とほぼ変わらないものであったと考えられる。築城時には本丸に三重・南向きの天守がそびえ、二重櫓5棟、平櫓1棟、冠木門8棟が並んでいた。しかし、元和3（1617）年の雷火によって二の丸の建築物が焼失したとされ、17世紀のうちには天守も失われた。

佐伯城築城後の八幡山は、「城山」と呼ばれ、現在に至る地名として定着した。寛永14年（1637）、3代藩主・高直の時、藩主の幼年を理由に三の丸に御殿を増築し、生活と藩政の場を城山の山上から三の丸に移すとともに、三の丸の出入口には三の丸櫓門を創建したとされる。これにより山上の曲輪群は利用されなくなり、荒廃が進んだ。これを憂慮した6代藩主・高慶は、宝永6年（1709）から享保13年（1728）まで、およそ20年間に及ぶ大修築を実施した。この大修築は、築城時の姿を取り戻すことを企図した大規模な事業であった。ただし、天守は再建されていない。この後は地震や風水害を原因とする修理がその都度行われ、幕末まで維持管理は継続された。

明治2年（1869）の版籍奉還により、佐伯城

と城山は国有となり、明治4年（1871）のいわゆる存城廃城令によって廃城となり、山上の建築物は全て解体された。麓の三の丸については藩庁などの庁舎とするため、御殿と櫓門は解体を免れ、土地も毛利家所有となった。明治34年（1901）には国有地の払い下げを受け、城山も再び毛利家の所有となった。

明治以降の城山は公園として、また周辺住民にとって最も身近な名所となっている。明治26年（1893）には、佐伯に教師として赴任していた国木田独歩が毎日のように登山し、その歴史と自然を絶賛している。大正期には登山道が開削され、昭和4年（1929）には当時の佐伯町長をはじめとする有志の出願により、8代藩主・高標を祭神とする毛利神社が本丸に創建され、昭和8年（1933）には山頂部の土地が佐伯町から毛利神社へ寄付された。太平洋戦争時の空襲で神社は破壊されたものの、戦後も城山は佐伯のシンボルとして親しまれている。昭和57年（1982）、城山の土地の大半が毛利家から佐伯市へ寄付された。平成4年（1992）に城山は都市公園となり、近年は観光活用も期待されている。

三の丸は、廃城時には建築物の解体を免れ、幕末期に建てられた御殿が庁舎や学校、公会堂などとして使用され続けた。その過程で、御殿は改築や一部解体が進み、昭和45年（1970）には最後まで残されていた玄関周辺部分も、佐伯文化会館を建設するため解体が決定された。これに対して、地元郷土史研究者を中心に、貴重な御殿建築の保存を求める声が上がった。最終的には玄関周辺のみを船頭町の住吉神社の隣に移築し、集会所として利用することで決着した。移転後の御殿は「住吉御殿」と呼ばれ、地域に定着している。

現在の三の丸には、三の丸櫓門が残されている。寛永14年の創築後に2度の再建を経たもので、佐伯城の建築物では城内に現存する唯一のものである。その背景となっている城山と佐伯城跡とあわせ、佐伯の歴史・文化の象徴として広く知られている。

なお城郭の名称については、「佐伯城」のほか「鶴ヶ城」「鶴屋城」や「塩屋城」がある。このうち、「鶴ヶ城」「鶴屋城」「塩屋城」の由来については諸説あるが、佐伯藩における使用の実態は明らかではない。佐伯藩の諸記録においては、「御城」「御山城」「本城」のほか、遅くとも18世紀以降に「佐伯城」が定着したとみられ、幕府へ提出する絵図などで使用されている。こうした状況から、佐伯市教育委員会では「佐伯城」（史跡名・周知の埋蔵文化財包蔵地名としては「佐伯城跡」）を用いており、本報告書においても同様である。

ところで、このような佐伯城や佐伯城下町の沿革は、明治以降の地元の郷土史研究者による研究が基礎となり、昭和49年（1974）にまとめられた『佐伯市史』（佐伯市史編さん委員会1974）にもとづいている。佐伯城跡に関する研究の端緒としては、平山小文治（右文治とも）が明治期に著した『鶴藩略史』の存在が知られる。歴代藩主の事績が漢文でまとめられていたようであるが、原本は現存しない。戦後に増村隆也による『鶴藩略史』の現代語訳（平山編・増村訳1948）が行われ、これにより本書の存在と内容が知られることとなった。

明治から昭和にかけては郷土史研究者・佐藤蔵太郎（鶴谷（かくこく））の活躍があり、『鶴城略記』（佐藤1886）、『佐伯秘説録』（佐藤1914）などが挙げられる。これらの著作の中では、佐伯城跡に関しては古老が語る伝承とともに、一部の近世文書の内容も紹介されているが、史跡であるとともに身近な名所として記述される傾向も強い。明確に文化財として取り上げられたのは、『史蹟名勝天然記念物調査報告』第3輯（大分県史蹟名勝天然記念物調査会1924）が初めてであろう。佐伯城については佐藤が執筆し、現状と由来伝承をまとめている。また増村隆也による『佐伯郷土史後編』（増村1952）は、文献史料を基礎として作成した地方史として注目されるが、一次史料と二次史料、後世の伝承が

混在する点に留意が必要である。

これらを基礎資料として採用した『佐伯市史』では、編さん時までに発見されたものを含む近世史料が取り上げられているものの、基本的な情報は佐藤や増村が紹介したものと大きく異なるものではない。また、こうした刊行物はあくまでも郷土の歴史をまとめたもので、佐伯城については毛利高政の事績としての視点で描かれており、佐伯城を通史で歴史的にとらえたものとは言い難い。

昭和40年代後半からは、郷土史研究団体・佐伯史談会による史料の調査が盛んに行われてきた。なかでも小野英治氏は現地の踏査に加えて関連資料の調査・収集を積極的に行っている。小野氏をはじめとする史談会員の活動により、多くの個人蔵資料が公表されることとなった。

佐伯市教育委員会においても、昭和50年に毛利家から寄贈を受けた藩政史料の整理、目録作成を行ったほか、平成6年（1994）からは佐伯藩の家老が藩の歴史や重要事項を整理した「温故知新録」の編集・刊行事業に取り組んでいる。平成15年（2003）には藩主家に伝来する資料の調査報告書を刊行した。直接的に佐伯城跡を主眼とした事業ではないが、これらの資料に含まれる佐伯城関連の情報は多岐にわたり、また性質上、そのほとんどの史料が藩の公的な記録であることから、重要性は高い。

このような基礎的な調査・研究の進展により、佐伯城跡に関する情報は質・量ともに増加している。

【参考文献】
・飯沼健司　2007「海と山と古代の道」『図説海部・大野・竹田の歴史』　郷土出版社
・大分県教育庁埋蔵文化財センター　2005 『津久見門前遺跡　瀬戸遺跡　佐伯門前遺跡』大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第３集
・大分県教育庁埋蔵文化財センター　2016 『森の木遺跡発掘調査報告書』大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第88集　大分県教育委員会
・大分県史蹟名勝天然紀念物調査会　1924 『史蹟名勝天然紀念物調査報告』第３輯
・大分県農政部農村整備課　1996 『土地分類基本調査　佐伯・鶴御崎』
・小野英治　1966 「豊後佐伯城の研究　其の七」『佐伯史談』14号　佐伯史談会
・玖珠町教育委員会　2000 『角牟礼城跡』玖珠町文化財調査報告書第12集
・佐伯市　1982 『佐伯　歴史文化環境整備計画のための調査報告書』
・佐伯市教育委員会　1958 『白渕遺跡』
・佐伯市教育委員会　1979 『佐伯藩政史料目録』
・佐伯市教育委員会　1989 『佐伯氏一族の興亡』
・佐伯市教育委員会　1990 『汐月遺跡』
・佐伯市教育委員会　1995 ～ 2019 『佐伯藩史料　温故知新録』一～十三
・佐伯市教育委員会　1998 『樫野古墳』
・佐伯市教育委員会　2003 『毛利家資料調査報告書　工芸品・絵画・古文書』
・佐伯市教育委員会　2014 『柳牟礼城跡関連遺跡発掘調査報告書２』
・佐伯市教育委員会　2014 『佐伯城跡測量調査報告書　佐伯市内遺跡試掘確認調査報告書』
・佐伯市歴史資料館　2014 『佐伯市歴史資料館　常設展示案内』
・佐伯市史編さん委員会　1974 『佐伯市史』
・佐藤蔵太郎　1886 『鶴城略記』
・佐藤鶴谷　1916 『佐伯秘説録』
・寺岡易司・奥村公男・村田明広・星住英夫　1990 『佐伯地域の地質』　地質調査所
・豊田寛三　1983 「浦方と産業」『大分県史　近世編Ⅰ』 大分県総務部総務課
・豊田寛三　2000 「文献からみた角牟礼城跡」『角牟礼城跡』玖珠町文化財調査報告書第12集　玖珠町教育委員会
・楢本譲司　1983 「佐伯藩政の確立と近世農村の成立」『大分県史　近世編Ⅰ』 大分県総務部総務課
・平山小文治編・増村隆也訳　1948 『鶴藩略史』
・増村隆也　1953 『佐伯郷土史後編』

第３章　調査の経過と概要

第１節　一次調査

一次調査では、平成 21 年度から平成 25 年度にかけて測量調査を実施した。各年度の調査対象は以下のとおりである。概要については、『佐伯城跡測量調査報告書』で報告済みであるので、本書では割愛し、次章でその成果を述べる。

・平成 21 年度（2009）
　山頂部の本丸・北出丸の測量調査
　山腹の踏査
・平成 22 年度（2010）
　山頂部の二の丸・西出丸の測量調査
・平成 23 年度（2011）
　雄池・雌池の測量調査
　城道の踏査
・平成 24 年度（2012）
　三の丸の測量調査
　搦曲輪・城道の測量調査
　各曲輪測量図と地形図の合成
　佐伯城跡・城下町の空中写真撮影
・平成 25 年度（2013）
　調査成果の統合
　報告書作成

第２節　二次調査

平成 27 年度から令和３年度にかけて実施した二次調査では、一次調査後の課題であった石垣の調査を軸に開始し、確認調査・瓦の調査・文献資料調査等を加えて総合調査とした。

各年度の経過と調査の概要は以下のとおりである。

・平成27年度（2015）

石垣調査票の作成を開始するにあたり、調査票の様式の検討を行った。『石垣調査のてびき』（文化庁文化財部記念物課 2015）を参考に、佐伯城跡の石垣の特徴を適切に把握するための項目を設けた。

石垣調査票の作成対象は、観察や機材の搬入が容易な三の丸とし、三の丸櫓門の左右の石垣のほか、庭園部に残る石垣も対象とした。

・平成28年度（2016）

天守台と本丸の石垣を対象に石垣調査票の作成を行った。

なお、この年の 10 月に、台風によって雄池と雌池の間の斜面が崩落し、雌池に大きな被害が発生した。被災後の状況を記録し、今後の復旧の参考とするため、佐伯市の単独予算で雄池（おんいけ）・雌池（めんいけ）の清掃と３Ｄモデル作成を行った。この災害対策の過程で、雄池の前面に新たな石垣を発見した。

・平成29年度（2017）

二の丸北半の石垣、本丸北側の石垣及び平成 28 年度に雄池前面で発見した石垣を対象に、石垣調査票の作成を行った。特に二の丸二重櫓下の石垣については、佐伯城跡の中で最も古く、毛利高政入部以前の技術が見られたことから、３Ｄモデルの作成も行った。なお、次年度以降の調査計画検討のため、本丸外曲輪北斜面の石垣の清掃を行ったところ雛壇（ひなだん）状の構造を持ち、隅角部に隅を作らない特異な形状の近世石垣であることが判明したため、次年度の調査計画に追加することとした。

また、前年度に発生した斜面崩壊による雌池の被害状況を把握するため、土砂に埋没した雌池の確認調査を実施した。さらに、崩落した斜面の安定化工法を検討するため、雄池周囲での確認調査を行った。

・平成30年度（2018）

二の丸南半、西出丸、北出丸南半に加え、前年度に近世の石垣であると判明した、本丸外曲輪北斜面の雛壇状石垣の調査票作成を行った。雛壇状の石垣については、清掃の結果、隅角部には隅がなく、それぞれの段は天端面まで石を築いていることが判明した。ただし、調査票の性質上、石垣立面を対象としたものであり、天端面の記録には至らなかった。

・令和元年度（2019）

北出丸の北東部を対象とした石垣調査票の作成を行った。さらに、前年度に調査票の作成を行った本丸外曲輪北斜面の雛壇状石垣に対して、天端面を含む全面を検出し、3Dモデルの作成を実施した。

また、三の丸に建てられている佐伯文化会館の解体計画との調整を行うため、三の丸の遺構残存状況を把握することを目的とした確認調査を実施した。調査の結果、文化会館周辺には近世の整地層が残されており、礎石の痕跡と思われる遺構を確認した。

これまでの調査票作成や確認調査などによって、佐伯城跡の史跡としての重要性が明らかとなってきたことから、調査事業の目的を石垣の現状把握にとどまらず、瓦や絵図・文献史料の調査も踏まえた総合的な価値の把握とすることとした。

このほか、市の単独予算によって、三の丸に残る庭園部の平面実測及び平成28年度に被災した雌池の復旧を行った。

・令和2年度（2020）

北出丸北西部と北斜面、登城の道、西出丸南西斜面の石垣に加え、前年度に復旧を終えた雌池、雄池を対象に、石垣調査票を作成した。

また、二の丸と捨曲輪を対象として、遺構の残存状況を把握するための確認調査を実施した。二の丸においては、宝永～享保にかけての大修築で建てられた二の丸居宅（屋形）の玄関部分と考えられる石列を検出したほか、二の丸の外縁部に見られる石敷きも近世の遺構であることを明らかにした。捨曲輪においては、現状の地形が人為的な造成の結果であり、遺構であることを確認した。

前年度の調査事業の方針変更を受け、城内を対象とした瓦の表採や絵図・文献史料の整理を開始した。

・令和3年度（2021）

若宮の道、独歩碑の道などの途上や、斜面部に存在する小規模石垣を対象とした石垣調査票の作成を行った。

総合調査の一環として、表採・出土瓦の整理、絵図・文献史料の整理を行った。

これまでの調査事業の成果を取りまとめ、佐伯城跡の特徴を把握するための総合調査報告書を刊行した。

第４章　調査の成果

第１節　測量調査

１．目的と方法

佐伯城跡については、これまで郷土史研究者を中心とする調査・研究が行われてきた。行政による調査の開始となったのが、平成21年度（2009）から５か年をかけて実施した、佐伯城跡の第一次調査である。佐伯城跡の現状を把握し調査・研究の基礎資料となる平面測量図を作成することを目的とした調査事業である。

作図に際しては、調査指導委員会の指導を受けて現地踏査を行い、絵図史料も検討したうえで近世の城郭遺構であると判断できるものを測量対象とした。縮尺は、城道の道幅を表現できる１/500を基本とし、重要遺構と位置付けられた雄池・雌池は１/50での測量図も作成した。

検討対象とした既知の絵図史料のなかでも、元文３年（1738）に描かれた「御城幷御城下絵図」は構造が詳細に描かれて情報量が多く、特に有用であった。

２．佐伯城跡の構造

（１）概要

佐伯城跡は、番匠川の河口に位置する城山（築城時は八幡山（はちまん））に築かれた山城である。城山は東西約900ｍ、南北約１kmの独立丘陵で、現在の最高所は標高146ｍ、麓の標高は約２ｍで、比高差は144ｍを測る。

佐伯城跡の城郭遺構は山頂の本丸、本丸外曲輪、二の丸、西出丸、北出丸、捨曲輪Ⅰ～Ⅳ、雄池・雌池、さらに南東麓の三の丸（尾ノ上茶屋含む）と、山頂と麓をつなぐ城道で構成される。山頂は最高所を本丸とし、これを囲む本丸外曲輪がある。本丸外曲輪から南西方向に二の丸、その南側に西出丸を配置し、本丸外曲輪から北側には北出丸を配置する。また本丸外曲輪、西出丸、北出丸からそれぞれ東、南西、北西方向に伸びる尾根を平坦に削平し、捨曲輪とする。雄池と雌池は、本丸から北西方向の谷筋に造られた人工池である。三の丸は、本丸から南東の裾部に位置し、城山の麓から６ｍ高い位置に造成された曲輪である。

現在の佐伯城跡は、三の丸櫓門を除いて建築物は全て現地からは失われている。測量調査の対象とした遺構は、曲輪を構成する石垣や、人為的に造作された地形である。（図13・図14）

（２）本丸

佐伯城跡の最高所に位置する（図15・図16）。平面形は五角形を呈し、隅（すみ）は北西部と南西の廊下橋と接続する箇所は直角、他は鈍角となっている。二の丸とは廊下橋によって接続され、他の曲輪とは独立していた。現在、廊下橋は失われコンクリート製の橋がかけられている。登城の道から本丸外曲輪へ入るルートと、二の丸へと上がり、廊下橋を通って本丸へと到達する複雑な導線を構成している（第４章第４節２（６））。また廊下橋から本丸へと上がる階段は幅約90cmとかなり狭く造られている。近世においては、本丸への唯一の入口であった。

本丸曲輪の中央からやや西よりに、石垣天端で東西16.6m、南北14.6mの方形、高さ約1.5mで天守台がある。初期の佐伯城は三重で南向きの天守を有していたと藩の記録に伝えられるが、それは失われ、以降再建されなかった。宝永６年（1709）「佐伯城修復願図」以降の絵図では方形の天守台のみが描かれ、18世紀には失われていたことが判明している。

本丸の東には、本丸と本丸外曲輪をつなぐコンクリート製の階段が設けられている。この階段や左右の石垣は、昭和４年（1929）に天守台跡に創建された、毛利神社にかかわる改修によるものと考えられ、階段左右の石垣（図15▩部）の隅が明瞭でなく、丸みを帯びた鈍角となっている。階段を上って天守台へと向かう石敷きも、階段とあわせて追加されたものであろう。残されている全ての近世の絵図には、この

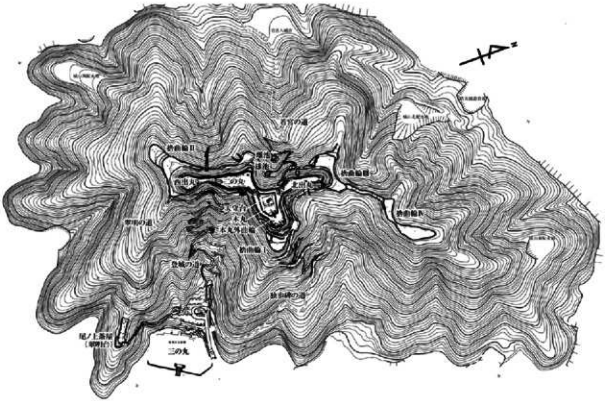


図13　佐伯城跡全体測量図（S=1/6,000）

図14 「御城并御城下絵図」（元文３年・部分）

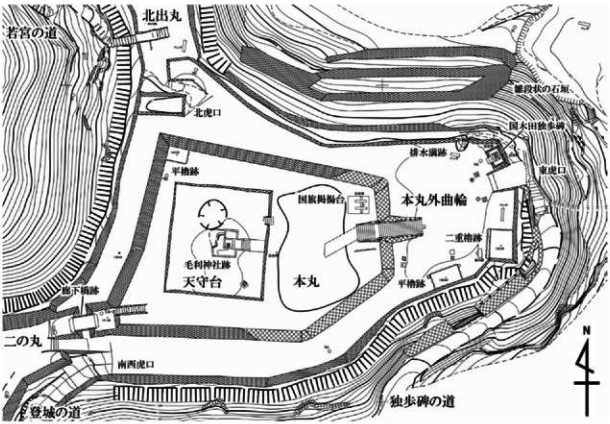


図15　本丸・本丸外曲輪測量図（S=1/600）

図16 「御城并御城下絵図」（元文３年・部分）

階段の位置に二重櫓が描かれている。

北西隅には長軸3.2m、短軸2.2mの石敷きの櫓跡がある。安政2年（1855）より後の絵図で描かれるようになるもので、安政元年の地震後の復旧で建てられたものと考えられる。

（3）本丸外曲輪

本丸の周囲を取り囲む曲輪である（図15・図16）。本丸との比高差は約6m。旧城下町である佐伯の市街地や佐伯湾・豊後水道方向への眺望が開けていることから、訪れる市民・観光客は多い。

本丸の東側に比較的広いスペースを有し、独歩碑の道から入る虎口がある。虎口は城道を登って左におよそ90度曲がり、スロープ状の石畳で外曲輪に入る。ただし、石畳の最下部には石段が見えており、石畳で覆われていると見られる。近世の絵図では、左右の塀と並んで門が描かれているが、近代以降の図では門が塀から後退した位置にある。また、石畳となっている範囲は岩盤が露出しているように描かれる。絵図上の表現が簡略化されたものであるとも考えられるが、近代以降に登城の道最上部や石畳部分が改修されている可能性もある。

曲輪内部の地表面には、拳大の礫が敷かれている。藩の記録では、正徳3年（1713）に塀の内側に栗石を敷きならべるよう指示が出されており（「元禄・宝永・正徳・享保日記」・資No.110）、これも近世の遺構であると位置づけられる。

東側の虎口から南には、長軸4.5m×短軸3.5mの石敷きの二重櫓櫓台が残されている。この櫓台から南西にも長軸4.8m×短軸2.4mの石敷きの平櫓跡があり、宝永6年（1709）「佐伯城修復願図」には「鐘撞堂」、明治初期の「豊後国佐伯城図」では「鐘撞所」と記載され、他の時期の絵図でも櫓が描かれる位置である。

虎口の北には、昭和31年（1956）に建立された国木田独歩碑がある。近世の絵図では櫓が描かれる位置にあたるが、現在は独歩碑のため石垣以外は観察できない。独歩碑の5mほど西には、曲輪を構成する石垣天端部の流失がみられ、土が流失して窪んだ箇所に凝灰岩の板石が露出している。明治期の「御山城之図」では排水口が描かれており、この板石は埋設されていた排水溝の底板と考えられる。

本丸外曲輪の北側は、山頂域郭内では唯一の食い違い虎口で北出丸へと続く。ただし食い違いの角度は直角とはならず、120度ほどの鈍角となる。絵図では食い違いの形状が簡略化されて描かれているものの、ほぼ全ての絵図で櫓門が描かれている。

本丸外曲輪の北側斜面には、石垣が雛壇（ひなだん）状に築かれている。各段の天端面に表土が堆積しているため、測量図では段の間隔が空くように表現されているが、下の犬走状通路から合計4段の石垣が一体の構造物として築かれたものである。西側は一面の石垣にまとまり、岩盤へとすりついている。絵図・文献史料で時期・機能の裏付けも確認されており、詳しい特徴は、第4章第2節の石垣調査の項で述べる。

（4）二の丸

本丸外曲輪から南西に配置される、山頂では最も面積の広い曲輪である（図17・図18）。本丸外曲輪からは約2m高く、本丸からは約4m低い位置にある。廊下橋や本丸外曲輪とつながる北東と二重櫓が置かれた北西を除いて直角の隅はなく、鈍角の入隅（いりすみ）と出隅（ですみ）の組み合わせで構成される。

北西方向にやや突出するか所があり、現在は国木田独歩の文学碑が設置されている。近世の絵図においては二重櫓が置かれた位置であるが、地表面には痕跡を確認することはできない。

曲輪の東と西では、石垣に平行して天端から約1.5m内側に石列が確認でき、角を直角に成形した角石をすえたか所もある。享保年間の「二之御丸惣地引之図」（図19）によると、二の丸の塀は廊下塀であったと考えられ、その基礎や出入口部の遺構であろう。

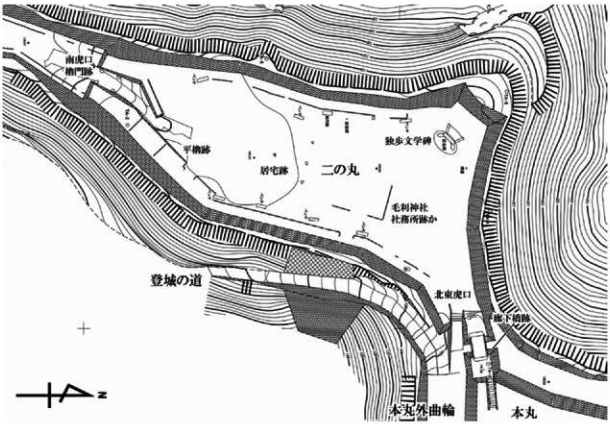


図17　二の丸測量図（S=1/600）

図18 「御城并御城下絵図」（元文３年・部分）

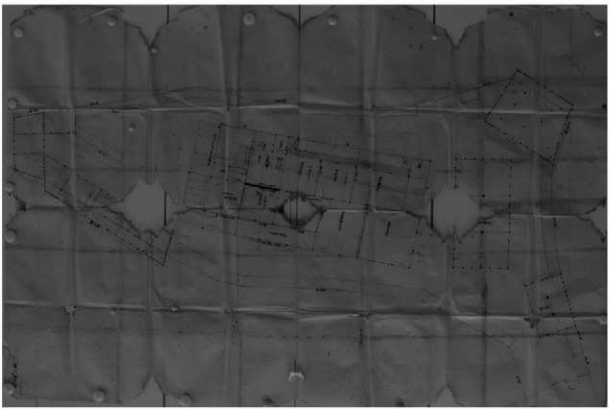


図19 「二之御丸惣地引之図」（享保年間）

南東部では、石垣天端と並行する石列の間隔が約3mまで広がる。絵図では規模の大きい平櫓が描かれ、これと対応するものと考えられる。二の丸の中央には、逆L字型に並ぶ石列と、礎石らしき礫が点在している。享保期の絵図・文献史料では「居宅」や「屋形」と呼ばれる大型の建物が中央に位置し、後の昭和4年(1929)頃には本丸の毛利神社社殿・拝殿とあわせて社務所が建設されたとみられる。地表面で観察される石列・礎石と、絵図・文献史料等に見える建築物との対応については、確認調査を実施したので、第4章第5節確認調査の項で述べる。

曲輪の縁辺部では、本丸外曲輪と同様に地表面に石敷きが観察できる。ただし、曲輪の北側の石敷きについては、北の石垣天端の上まで覆っている状況が確認できることから、塀などの建築物が解体された近代以降に敷かれたもので、礫が比較的大きい傾向にある。

曲輪の南は、西出丸から続く虎口である。動線上には表土の堆積がないためか、石敷きが明瞭に観察できる。各種の絵図では虎口に櫓門が描かれており、その門礎を確認することができる。また、西出丸からの導線は門から斜めに伸びる石垣と塀によって、直線的な移動が遮られる。

（5）西出丸

二の丸から南にやや標高を下げた位置に配置された曲輪である（図20・図21）。二の丸と西出丸南の平坦面との比高差は約4m。

南北に長く、北半分は南に向かって下る斜面である。南半分の平面形状は不整多角形となる。東西の石垣天端には塀の基礎とみられる石列が残っている。天端と石列の間隔は狭く、45cm程度である。

曲輪の南西隅に、長軸5.7m×短軸4.5mの石敷きの二重櫓櫓台が残る。この箇所は、北側から続く石垣の天端ラインからは内側に約1.8m程後退し、クランク状の平面形状となる。絵図・文献史料から安政元年（1854）の地震で櫓・石垣が被害を受けたことがわかっており、調査

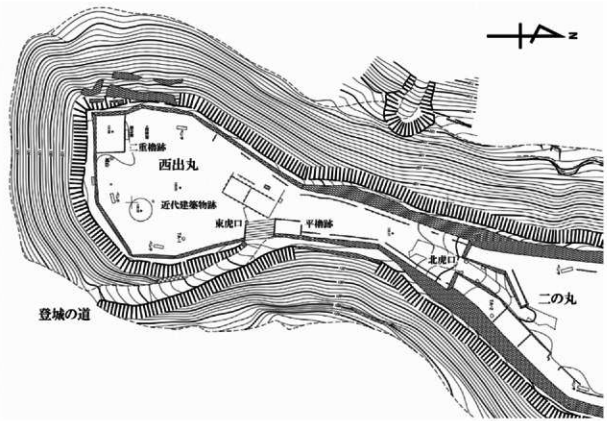


図20　西出丸測量図（S=1/600）

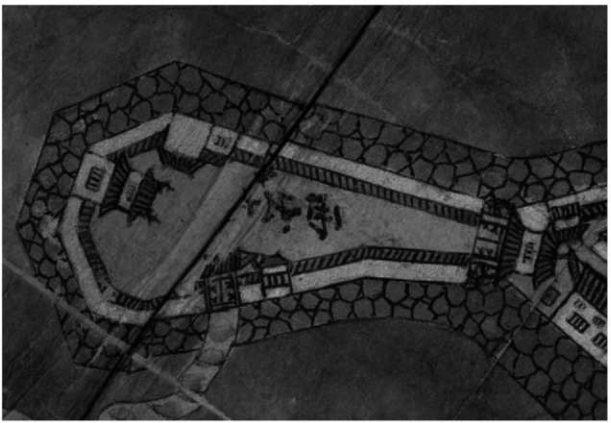


図21 「御城并御城下絵図」（元文３年・部分）

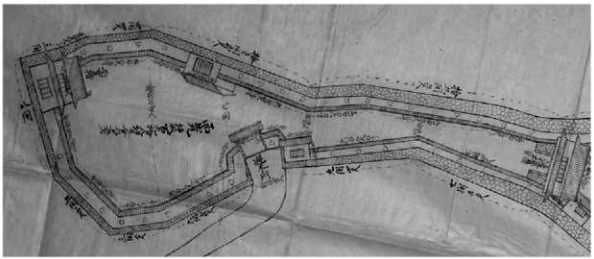


図22 「豊後国佐伯城図」（明治初期・部分）

指導委員会の指導により、その後の復旧時にラインを後退させたものと考えた。また、この二重櫓櫓台の西側斜面で、斜面を覆うように築かれた石垣の存在が、佐伯城跡調査指導委員会の指導のもと確認できた。現状では腐葉土などの堆積によって全体を目視できないが、斜面全体を覆っている可能性もある。

曲輪の東には、登城の道から石階段で進入する虎口がある。他の虎口に比べて幅が広く、約4.5m を測るが、近世の絵図では他の虎口と大差のない規模で、門と左右の塀が同一線上に描かれている。一方で明治初期の「豊後国佐伯城図」（図22）では、門の位置が左右の塀から曲輪の内側に後退し、さらに開口部の南側３分の２程が冠木門で、北側３分の１程は塀が描かれている。現在残る階段や石垣の形状からは、明治の絵図の方が実態に近いと考えられる。

曲輪中央付近には、建築物の基礎とみられる石列があるが、一部にコンクリートが残り、東端部が虎口に近すぎることから、近代以降のものと判断した。また曲輪の中央やや南東よりにレンガによる円形の窪みがある。大戦時の高射砲跡ではないかとされてきたが、規模が小さく、出入口もないことから異なるものの可能性が高い。近代以降の施設ではあるが、現時点では用途は不明である。

（6）北出丸

本丸外曲輪の北に配置された曲輪である（図23・図24）。本丸外曲輪との比高差は約１m。南北に細長く伸び、わずかにくの字型に曲がる。他の曲輪と同様に、虎口や二重櫓櫓台を除き直角の隅はない。

北端に長軸 5.5m × 短軸 4.5m の石敷きの二重櫓櫓台がある。二の丸や西出丸のような、曲輪外縁の塀の基礎はほとんど観察できないが、一部には石垣天端から1.5m 内側に石列が残る。曲輪中央の東側には、小規模な平櫓の基礎石列が観察できる。

二重櫓櫓台東側の斜面には、斜面全体を覆うように石垣が築かれている。

（7）捨曲輪（すてくるわ）

本丸外曲輪の東、西出丸の南西、北出丸の北に伸びる尾根上にある平坦面である。本報告書では、それぞれ捨曲輪Ⅰ～Ⅳと仮称する。どの捨曲輪の周囲にも、中世山城に典型的な堀切や竪堀のような遺構は見られず、中世の遺構ではないと判断した。一方で自然地形とも考えられず、確認調査を実施して裏付けを行った（第４章第５節３）。

捨曲輪はほとんどの絵図では描かれず、「御城并御城下絵図」（元文３年・1738）にのみ描かれている。捨曲輪の名称とともに、長さや幅が記載されるが、建築物や工作物は皆無であ

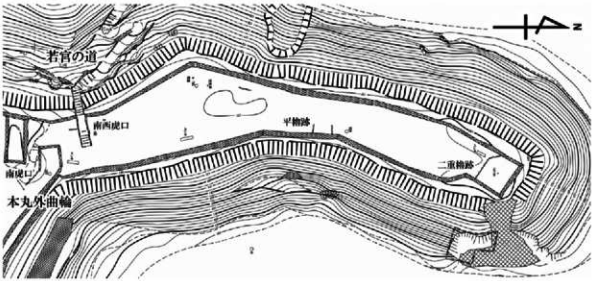


図23　北出丸測量図（S=1/600）

図24「御城并御城下絵図」（元文３年・部分）

る。それぞれの捨曲輪は、登城道と合流しながら犬走状の通路で連結されている。

捨曲輪Ⅰは本丸外曲輪の東に位置し、現在の独歩碑の道と一部合流している（図25・図26）。本丸外曲輪との比高差は約19mである。現状は、公園施設の東屋が置かれている。縁辺部に礫が並ぶ様子が観察されるが、礫の面をそろえる様子はなく、現代に土留めのために並べられたと考えられる。なお捨曲輪Ⅰの北側にも略方形の平坦面が作られているが、これは絵図資料と対応しない。コンクリート擁壁が設置されていることから、現代の改変によるものである。

捨曲輪Ⅱは、西出丸の南西に造作された平坦面である（図27・図28）。２段に造られ、西出丸との比高差は上段で約15m、下段で約19mを測る。上段と下段の間は緩やかな斜面で、切岸のような明瞭な段差はない。現状は、斜面の裾部に50cm前後の礫が並べられている。礫にはドリルによる穿孔がある。岩盤が露出している斜面から崩れた礫を、現代に園路を掃除した際に斜面裾に寄せて片付けたものであろう。ただし、このほかにも地表面に築石程度の大きさの礫が点在している。享保16年（1731）に、石垣修復に用いる石材を集め置いたとする記録（『御仕置帳』・資No.287）と関連する石材の可能性がある。

図25　捨曲輪Ⅰ測量図（S=1/1,500）

図26「御城并御城下絵図」（元文３年・部分）

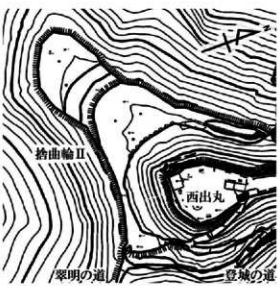


図27　捨曲輪Ⅱ測量図（S=1/1,500）

図28「御城并御城下絵図」（元文３年・部分）

捨曲輪Ⅲは、北出丸の北と北西に造成されている（図29・図30）。北出丸との比高差は約16mである。北出丸下の斜面裾部に礫が並ぶ状況は、捨曲輪Ⅱと同様である。

捨曲輪Ⅲからさらに北に尾根が続き、その先端に捨曲輪Ⅳがある（図29・図30）。捨曲輪Ⅳは逆くの字型に大きく曲がる尾根の頂部を平坦に造成したもので、北出丸との比高差は約12m、本丸外曲輪との比高差は約４mである。

こうした捨曲輪群は、佐伯城が築かれる以前に有事の際の駐屯地として設けられたものの、想定した用途で使用される機会はなく、史料からは後の城郭修理の際に資材置き場として利用された経緯が考えられることが、調査指導委員会において指摘された。

（8）雄池（おんいけ）・雌池（めんいけ）

本丸の西側で、最も大きな谷筋に造られた、上下２段の人口池である（図31・図32）。一次史料に名称は見られないが、遅くとも近代以降では上段を雄池、下段を雌池と呼びならわしている。雄池は標高114m前後、雌池は標高96m前後の位置にある。

どちらの池も、岩盤を平面方形に掘削し、池

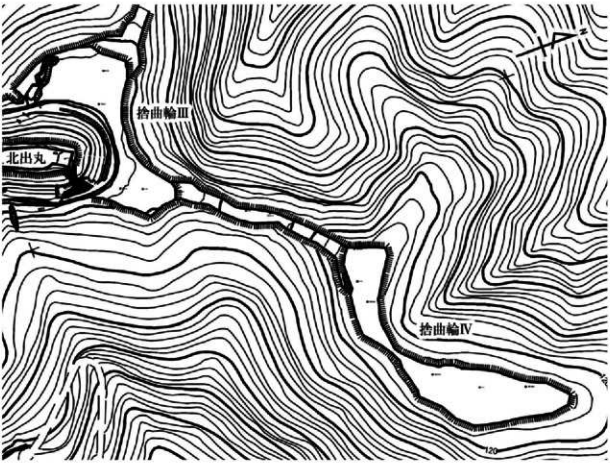


図29　捨曲輪Ⅲ・Ⅳ測量図（S=1/1,500）

図30 「御城并御城下絵図」（元文３年・部分）

図31　雄池・雌池測量図（S=1/1,500）

図32「御城并御城下絵図」（元文３年・部分）

奥は斜面上方からの土留めのために石垣を築いている（図33）。谷に集まる雨水を貯めるとともに、地下水も湧くため、水位が下がることはあっても完全に枯れることはなかったと言われている。

雄池は、およそ８ｍ×６ｍの方形の池である。池の奥はほぼ全面が石垣となる。池の奥に向かって左側には、奥から手前にかけて低くなりつつ、平面がカーブを描く石垣がある。池の奥の石垣との先後関係は要検討である。

池の手前側には、護岸の石垣と、池へと降りる階段が残されている。護岸石垣は２段になっており、積み直しが行われた可能性がある。護岸の石垣から土手状の通路を挟んだ位置に、小規模な石垣があることを確認した。

雌池は、およそ８ｍ×７ｍの方形の池で、雄池と同様に岩盤を掘削して造られている。池の奥は岩盤を残し、その上に石垣を築いて土留めとしていたとみられるが、この石垣は測量調査を行った平成23年度（2011）時点ですでに左上方から３分の２程度が失われていた。護岸の石垣と、池に下りる階段は良好に残っていた。

ところが、平成28年（2016）の豪雨により雄池と雌池の間の斜面が崩落し、雌池が被災する事態が発生した。これにより雌池は土砂に埋没し、護岸の石垣は最下部を除いて流失、背

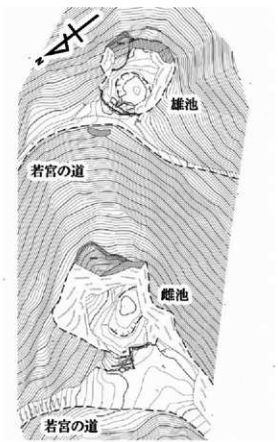


図33　雄池・雌池測量図（S=1/500）

面の石垣もさらにその大半が失われた。また崩落した土砂は谷を流れて山裾まで到達し、池と山裾をつなぐ都市公園の園路（若宮の道）や、麓の民家まで被害を受けた。これを受けて佐伯市・佐伯市教育委員会は復旧に取り掛かり、令

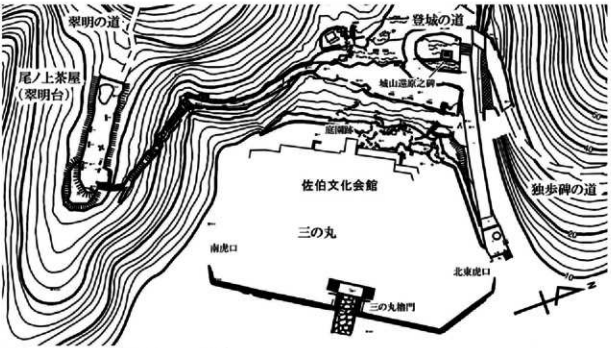


図34　三の丸測量図（S=1/1,500）

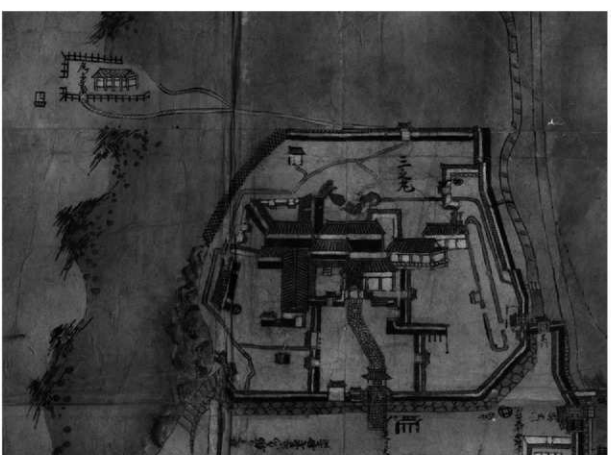


図35 「御城并御城下絵図」（元文３年・部分）

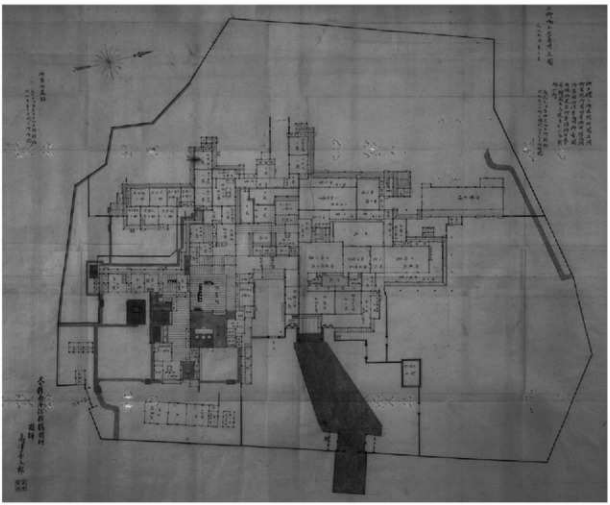


図36 「三御丸五歩壱間之図」（明治初期）

和元年度（2019）までに終了した。崩落した斜面の安定化工事により残された石垣の保護を行うとともに再崩落を防止、雌池では堆積した土砂の撤去後に護岸石垣の積みなおしと階段の復旧を行った。これらの復旧の過程については、別途報告書を刊行する予定である。

本報告書では、平成23年度に実施した、一次調査時の測量図を掲載する。

（9）三の丸

佐伯城跡の南東麓に位置する曲輪である。標高は約8m、山裾との比高差は約6m、本丸との比高差は約136mとなる（図34・図35）。三の丸は、寛永14年（1637）に創築されたとされている（『鶴藩略史』平山編・増村訳1948）。ただしこの点については、このときに三の丸が新規に造られたのではなく、築城時から小規模な曲輪はあったとする指摘（小野1966）がある。佐伯城跡調査指導委員会でも同様の指摘があり、山頂の城に対して、中世山城における根小屋に相当する施設があったことが想定される（第5章2（2））。

御殿が建てられて以降、藩主の居住と藩政の場を山頂から三の丸に移したとされ、幕末まで続いた（図36）。廃城後、山頂の曲輪群の建築物は解体されたが、三の丸の建築物は解体を免れた。御殿も時代を経るにつれて徐々に解体が進み、最後まで現地に残されていた玄関部分も、昭和45年（1970）に佐伯文化会館建設のため解体・移設された。現在は御殿の位置に佐伯文化会館が建ち、周囲は舗装されているため御殿の遺構を地表面に見ることはできない。

南東から三の丸に入る正面の虎口には、城郭建築で唯一現存する三の丸櫓門がある。門の内側の導線は、現状ではT字型になっているが、これは昭和46年（1971）の佐伯文化会館建設時に整備されたものである。それ以前は、櫓門から御殿まで、石畳のスロープとなっていたことが絵図・文献だけでなく写真にも残っている。南東方向の大手門から直進し、石畳のスロープから櫓門を通って三の丸・御殿へと入る導線である。

なお、三の丸へ入る虎口は櫓門のほかにも曲輪の北東と南に一か所ずつ設けられていた。北東側の虎口は現在も三の丸への入り口の一つとして利用されているが、舗装のため門の痕跡などは見られない。門の北側に伸びていた塀の痕跡として、石垣が残されている。南側の虎口は、その前面の斜面が藪に覆われて観察も難しく、門が置かれた位置は舗装されているため、遺構は見られない。なお、三の丸内部の造営・修理については第4章第3節6でも述べる。

三の丸の北西は、城山へとつながる斜面となっており、ここには庭園の痕跡としての景石や池がみられる。池の外形を構成する石列など、一部に文化会館建設時の改変はあるものの、特に斜面に配置された景石などは近世の状態を留めている。庭園部の池や園路を描いた絵図・文献史料としては、「御城幷御城下絵図」（元文3年・1738）が唯一のものである。

また、三の丸の南西尾根上には、享保12年（1727）に設けられた尾ノ上茶屋の跡がある。昭和43年に造成され、翠明台と名付けられた広場となっている。「御城幷御城下絵図」では櫓や東屋のような小屋が描かれるが、造成による改変のためか、現在の地表には遺構と認められるものは見られない。

（10）城道

現在の佐伯城跡は、都市公園でもあり、麓から山頂へ登る園路が4本整備されている。このうち、近世からの城道を踏襲した遺構と判断したものは1本ではあるが、残る3本も一部は近世の遺構と重複する箇所がある（図37・図38）。

登城の道は、三の丸の北側から入って正面の谷筋をつづら折りに登って山頂へ至る園路である。近世の絵図に描かれる道筋と一致している。「佐伯城修復願図」（宝永6年・1709）をはじめ、以降の絵図でも必ず描かれており、最も正式な登城道であったと考えられる。現状は、3合目以下はコンクリート擬木による階段となっており、現代の改修が加えられている。しかし、4合目から上は一部に近代の改修が加わることが石垣から判明するものの、部分的な石敷きや土留めの石垣などが残っており、近世の状況をよく留めている。

5合目付近には登城道の北側斜面の岩盤が掘削され、えぐれたようになっている箇所がある。元文3年の「御城幷御城下絵図」においては池が描かれており、この池の痕跡とみられる。8合目付近で、本丸外曲輪へ至る道と西出丸へ至る道に分岐する。この道の分岐も、絵図資料で確認することができる。

独歩碑の道は、三の丸から城山の東斜面を迂回して本丸外曲輪へと到達する園路である。大正13年（1924）、登城の道に比べて傾斜の緩やかな園路として開削され、昭和37年（1962）に拡幅と一部道路の新設が行われた。大半は近代以降の新規開削によるものであるが、8合目より上部は、「御城幷御城下絵図」に描かれる、山麓の武家屋敷から本丸外曲輪への城道と重複する。この近世の城道は、現在の園路の途中に一部が残されていることを確認した。

翠明の道は、三の丸の背後から南に迂回し、翠明台を経由して西出丸へと登る園路である。翠明台は昭和43年（1968）に佐伯市が整備した広場で、享保12年（1727）に6代藩主・高慶（たかのり）が普請を命じた（「高慶公御手日記（佐伯）」資No.242）尾ノ上茶屋の跡が前身であろう。尾ノ上茶屋と三の丸から茶屋への道筋は「御城幷御城下絵図」に描かれており、これらは現在

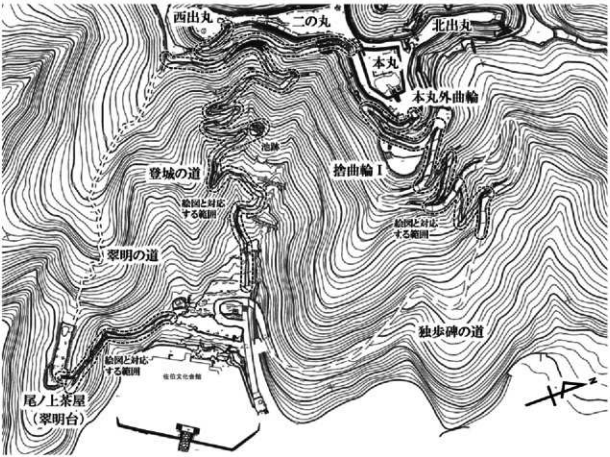


図37　登城の道・独歩碑の道・翠明の道周辺測量図（S=1/3,000）

図38 「御城并御城下絵図」（元文３年・部分）

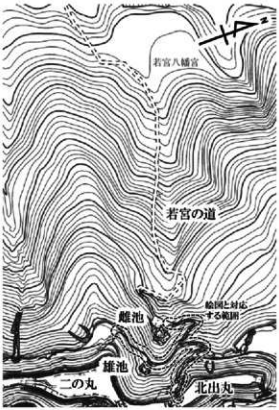


図39　若宮の道周辺測量図（S=1/2,000）

図40「御城并御城下絵図」（元文３年・部分）

の翠明台及び園路と一致している。ただし現在の翠明台から西出丸まで登る園路は、近世の絵図には見られないことから、昭和の翠明台整備後に設定されたとみられる。

若宮の道は、城山の北西麓に位置する若宮八幡社から山頂の北出丸へ至る園路である（図39・図40）。おおよそ７合目以下は大正13年に開削された園路をもとに、現代の改修が加わっている。直近では、平成28年度に発生した斜面の崩落によって土砂で覆われたが、令和元年度（2019）に修繕が完了している。８合目より上部の雄池・雌池から北出丸までの範囲は、「御城并御城下絵図」に描かれるものと合致している。一部にコンクリート擬木による改修が施されているが、土留めの石垣などは残されており、おおむね近世の状態を留めている。

こうした城道については、第４章第４節２（６）で建築物を踏まえた検討を加える。

【参考文献】
・小野英治　1966「豊後佐伯城の研究　其の七」『佐伯史談』14号　佐伯史談会
・佐伯市教育委員会　2014『佐伯城跡測量調査報告書　佐伯市内遺跡試掘確認調査報告書』
・平山小文治編・増村隆也訳　1948『鶴藩略史』